大智庵城絵図

松浦家家世伝は「地勢堅固絶壁の如し」と記し
大智庵城の当時の姿を簡潔に言い表している。
烏帽子岳の山麓に派生した独立した小丘の上に位置し
周囲は屏風状の急峻な崖に囲まれ、崖下を取り巻くように
流れる紋珠川は外堀の役目を果たしている。
まさに自然の絶壁の地形を活かした堅固な山城であった。
築城されたのは一般的には徳一年(1488)に平戸松浦からの夜襲で
一夜にして落城となった。
宅地化の影響で遺構のない山城と思われがちだが、そうでもない
特に主郭付近は招魂碑建設の際に行われた整備以外は
何か施設が造られたという記録はなく、その後、公園化されたことで
奇跡的に当時に近いと思われる地形を保っている。
他にも当時の城を囲む絶壁の名残がコンクリート越しに形として残っていたり
藪の中に分け入ると土の下に埋もれている苔むした石垣があったり
アパートの裏手の竹藪にひっそりと井戸の跡らしきものがあったりと
注意深く見れば僅かながら当時の痕跡を伺い知ることができる。
そして何よりも江戸時代中期に描かれたと思われる数枚の「大智庵城古図」や
「大門」「城山」「城之口」「屋鋪間」などの城に関する小字、城主の墓
様々な古書による大智庵城落城の記述等々、城の存在を証明する資料が
市内の他の山城に比べると数多く残されている。
今回は主郭を中心に東は泉福寺から西は紋珠岳までの広範囲を俯瞰りとして描いた。
大智庵城の築城年や落城年には諸説有り、その城の範囲もはっきりとしない
かつては頂上付近の狭い範囲のみを城として、武辺城から移った宗家松浦の
居城にしては狭すぎるとのことから城の存在さえも疑問視する声があった。
しかし大智庵城が実在していたことに間違いはなく、自身が長年に渡り
郷土史家の研究資料や市教育による調査報告書などを読んでいくなかで
徐々に大智庵城の姿が思い描けるようになってきた。
そして今回松浦史料博物館にて古図の実物を閲覧し、今まで曖昧であった
山田兄弟が忍び入った間道と大手門の位置などを明確にする事ができた事や
現地を歩き回り少数だが地元の方の話も聞くことができたことで
絵図を完成することができた。協力して頂いた皆様には心から御礼申し上げたい。
もちろんこの絵図は私個人の想像図であり科学的証拠はないが
この絵図が一つの材料となり、今後の解明に役立てれば幸いである。

令和2年9月1日　佐世保史談会　垣田鉄郎

大智庵城関連年表

延徳二年(1490)　宗家松浦14代当主、松浦丹後守定によって大智庵城築城
教法寺建立
※大智庵城の築城年代にはもう一つ説がある。
壱岡縁起などによれば、「松浦氏の4代目にあたる嫡子めぐるは
相神浦および有田を支配しそれぞれ大智庵城、唐船城を築城した」
としている。これを信じるならば嫡子生存したのは13世紀中期となり
延徳2年説との間に250年もの差が生じてくる。
松浦の今福に城を構えていた今福氏が古くからこの周辺の覇者の地に
防御を目的とした砦を構えていた可能性は充分あり得る

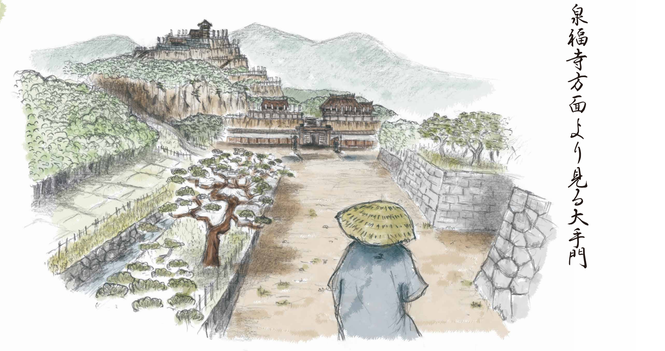
延徳三年(1491)　箕坪城の戦い
大智庵城主定は、連合軍(有馬・大村・志佐・佐々氏等)の
一員として平戸松浦氏が籠もる箕坪城を攻撃。

明応元年(1492)　宗家松浦14代当主、松浦丹後守定没する。
嫡男の政が宗家松浦15代当主となる。

明応三年(1497)　大内家が小弐家を攻める。小弐政資自害。
宗家松浦15代当主政の子、幸松丸誕生

明応七年(1498)　大智庵城の戦い
平戸の内紛により一夜にして落城する。
城主 松浦丹後守定 没する。
幸松丸、母と共に平戸へ人質として
捕らわれる。

烏帽子岳
山の田
山中観音堂
搦手
東出郭
主郭
空堀
泉福寺
墓地
屠殺場
屋敷間
ちごぶち
大手門
井戸
当主館
西出郭
深谷
間道出入口
紋珠川
相浦川
教法寺
水濠
政公の墓
鹿大明神
馬場
馬川
文珠堂
文珠の辻砦



泉福寺方面より見る大手門

文珠の辻砦　（現在地　紋珠岳）
昭和25年発行「日本城郭大系」には「本城郭の構所を瀬戸越城」として紹介してあり、堺木神の関門を足下にして立つ山で現在に至るまで瀬川口の関門を守る大智庵城の出丸的位置付けであったと思われる。
東方に大智庵城の主郭、西方に大智庵城の搦手口を見渡せる要衝であったと思われる。

文珠堂　（現在地　志賀神社入口鳥居から急坂を登って百手）
松浦史料博物館所蔵の「大智庵城古図（表題なし）」には大智庵城の名称の書かれた文珠堂の江戸中期頃の状況が詳細に描かれている。石積みが施設されており、現在とは異なる様相を呈していた。
現在の状況はそれらしい石積跡らしき急峻な斜面が広がるのみとなっており、往時の様子を伺い知ることは出来ない。

鹿大明神　（現在地　志賀神社）
「鎮国守国神社明治期神幣（明治3年）」によると創建は正長元年(1428)という。延徳2年(1490)大智庵城城主定が築城の際に、城の守護神として勧請したと伝えられている。その後文正3年(1498)大智庵城落城の際に焼失したが、慶長年間(1596～1615)に再建された。
現在の鹿大明神は平成13年に志賀神社の境内に移設されている。

馬川・馬場　（現在地　紋珠岳の麓を流れる川）
平成13年発行「佐世保の地名は語る」によると、志賀神社の麓を流れる小さな川を地元の人は「馬川」と呼び、馬の洗い場に使われていたことから「馬場」と呼ばれていたと思われる。

政公の墓　（現在地　志賀神社入口から60メートル程）
大智庵城現存最古の墓石である。
松浦史料博物館所蔵の「大智庵城古図（表題なし）」には大智庵城主定の墓として描かれている。
現在の墓石は、文政10年(1827)に松浦家第14代当主静山公が、大智庵城主定の墓として建立したものである。
静山公は、松浦家の歴史を編纂した人物としても有名であり、「甲子夜話」の著者としても知られている。

水濠　（現在地　泉福寺駐車場付近）
昭和59年発行の福郷土史の挿絵には大智庵城と志賀神社の間に水濠跡が描かれている。「今郷郷土史」には大正8年に発行されたものを基にして編集したものと思われる。現在も泉福寺駐車場周辺の地盤は低く、かなり盛土して造成が行われていることが見て分かる。

教法寺　（現在地　M泉福寺駐車場東口前、下泉福寺観音堂付近）
当時、城の西端にあり大智庵城主寺院宗家松浦氏の菩提寺として建てられていた。明応7年(1498)の落城の際に焼失したと伝えられるその後文正3年(1505)現在の元町に再建されたと伝えられている。
主郭から見て西側の一番近い場所にあり、位置関係からも当時は大智庵城の一部であったと思われる。

主郭　（現在地　大智庵城跡公園）
松浦史料博物館所蔵の「大智庵城古図（表題なし）」ではこの場所を、本城としている。
一見何気なくただ平らな場所に見えるが、主郭から見て北西方面の崖に向かって入り込んだ形状があり、郭山城によくある「狩り場での敵の侵入を防ぐ為に設けた空堀」と思われる。
また、主郭の東側と南側の一部分は、石垣が積まれており、江戸中期ごろまでは城の形状を保っていたと思われる。
現在は、大智庵城跡公園の整備の為に、土で埋められてしまっているが、発掘調査をすれば、当時の姿が現れてくるかもしれない。
現在は、大智庵城跡公園に移設した「鹿大明神」や「政公の墓」、「文珠堂」などの施設が建てられている。

間道出入口　（現在地　瀬戸越え下り口）
瀬戸越えの麓の切り立った崖の東南方角の一部分。
一見何気なくただ平らな場所に見えるが、主郭から見て北西方面の崖に向かって入り込んだ形状があり、郭山城によくある「狩り場での敵の侵入を防ぐ為に設けた空堀」と思われる。
また、主郭の東側と南側の一部分は、石垣が積まれており、江戸中期ごろまでは城の形状を保っていたと思われる。
現在は、大智庵城跡公園に移設した「鹿大明神」や「政公の墓」、「文珠堂」などの施設が建てられている。
なぜ主郭で瀬戸越えに空堀があるのかというと